

唯美的平和主義者としてのワイルド

——第二次アフガン戦争とジャーナリズム文化の観点から

緋田 亮

オスカー・ワイルドはその著作の中で、しばしば戦争に関して言及しているが、そのほとんどはトロイ戦争など、ヴィクトリア朝の人びとにとって「神話」あるいは「歴史」として捉えられているような戦争であり、同時代の戦争をテーマとして作品を書いたり意見を述べたりすることは比較的少ない。また、ワイルドと戦争を主題とした研究も、著者が知る限りあまりなされていない。確かに、唯美主義者の代表として自己宣伝し、活躍していたワイルドが、同時代の戦争あるいは平和といったテーマについて無関心であったとしても不思議ではない。ましてや、一般的に言われているようにヴィクトリア朝が“great peace”の時代、つまりイングランド本土での戦争が起らなかった平和の時代であったという時代背景に鑑みても、ワイルドが戦争や平和といった概念と距離をとっていることは自然なことかもしれない。しかし Patricia Morton が指摘をしているように、海外に目を向けると、この時代は大英帝国が小さな戦争や軍事行動に多くかかわっていた時期でもあり¹、実際にワイルドは、詩、レクチャーやインタビュー、そして童話において、同時代の戦争・平和についての考えを言葉に残している。本論文では、そういった表現活動を当時のジャーナリズムと併せて分析することによって、ワイルドの戦争や平和に対する態度を明らかにし、彼を——造語ではあるが——「唯美的平和主義者」として捉えることの可能性を示す。

ワイルドが1880年に *The World: A Journal for Men and Women* で発表し、翌年加筆・修正をした形で *Poems* に収録した詩“Ave Imperatrix”の一つのテーマは、1878年から1880年にかけて起こった第二次アフガン戦争である²。シャーロック・ホームズ・シリーズの John H. Watson が従軍した（という設定）ということでもよく知られるこの戦争であるが、戦闘員あるいは非戦闘員としても関与することがほとんどなかったワイルドが、このようないわゆる戦争詩を書くに至った不

可欠な要因としてジャーナリズムの存在が挙げられる。当時のジャーナリズムとこの詩との関係性を考えていくうえで、Reedによる“The combination of imperial expansion and ever-improving communications technology [. . .] meant that war became at once very close to and very far away from the British public”³という指摘は重要なものである。19世紀後半にかけて通信技術が発達していったことにより、イングランド本土にいる人々にとって物理的には遠く離れた場所での戦争が、同時に非常に近くに感じられていた当時の状況を考慮すると、第二次アフガン戦争が行われていた1878年から1880年の間ロンドンを中心に活動していたワイルドにとっても、物理的には非常に距離があるその戦争を、詩の題材にするほど身近に感じるに至った一要素として、ジャーナリズムの存在があったことは想像に難くない。

実際、詩の中で彼が描く戦地の情景は、当時の戦争報道、とりわけ絵を用いた視覚的な記事と大きく重なり合っている。例えば、第9、10スタンザの険しい山道とそれを登っていく大英帝国の兵隊のイメージはFigure 1⁴に描かれた場面と親和性の高いイメージを共有している。

For southern wind and east wind meet
Where, girt and crowned by sword and fire,
England with bare and bloody feet
Climbs the steep road of wide empire.

O lonely Himalayan height,
Grey pillar of the Indian sky,
Where saw'st thou last in clanging flight
Our wingèd dogs of Victory?⁵

THE DIFFICULTIES OF AN AFGHAN EXPEDITION FORESHADOWED.



Figure 1

このような新聞だけではなく、“The Mountain Passes on the Afghan Frontier of British India” (1879)の類の記事が雑誌にも掲載され、当時のヴィクトリア朝の人々が同時代的に共有

しうる知識として、戦争に関するイメージが存在していたことは注目に値する⁶。ワイルドの書簡を見る限りでは、彼が“Ave Imatrix”を書く際に、どういった報道や事実に影響を受けて執筆に至ったかということについて、彼は語ってはいない。しかしながら、戦場とイギリスという物理的距離を考慮すると、少なくとも

彼が同時代のジャーナリズムによって報じられたイメージを一つの源泉として詩を書いたということは明らかである。

創作のためだけでなく、自身の名声を高めるためにもジャーナリズムを巧みに利用したワイルドであるが、1882年に講演旅行のためアメリカを訪れた際、数多くのインタビューを受けていることは近年の研究でも注目を集めている⁷。その中の一つに、“Ave Imperatrix”に触れているものがある。

“Judging from the tenor of your own poems, I [interviewer] fancy that ‘Charmides’ (pronouncing the name with the soft accent) is your favorite poem, Mr. Wilde?”

“Cha—Charmides,” he replied correcting; “yes, that is my favorite poem. I think it my best. It is the most finished and perfect. The people of America have taken very kindly to my ‘Ave Imperatrix,’ however.”

“Perhaps a feeling of nationality prompts this choice.”

Mr. Wilde—Probably so.⁸

このインタビューでワイルドは、アメリカの人びとに“Ave Imperatrix”が好意的に受け取られていることを述べ、そしてその理由はこの詩が持つ“nationality”にあるのだろうと考えている。この“nationality”という語は、このやり取りにおける文脈では“Nationalism; attachment to one’s country or nation; national feeling.”⁹とあった、愛国心とも呼べる国民感情を表すものと理解することができ、現にこの詩は、John Sloanも指摘しているように、全体的には愛国的な響きを持っている¹⁰。しかし、同時に注目すべきことは、“Ave Imperatrix”が単純に大英帝国に対して全面的な愛国心を示し、その帝国主義的な戦争を手放して賛美している詩ではないことである。詩の後半部分、全31スタンザの第15スタンザ以降は、人の死など戦争による犠牲が描かれ、最終的には平和を祈願する表現で締めくくられている。例えば、平和主義的なイメージが描かれ始める第15スタンザでは、イングランドに一人座っている“Sad dove”——*Complete Works*の編者Bobby Fongは「おそらくヴィクトリア女王のことだと注釈をつけている」——は戦争に対して明るい表情はみせていない。“Here have our wild war-eagles flown,/ And flapped wide wings in fiery fight;/ But the sad dove, that sits alone/ In England—she hath no delight.”¹¹ 戦争に対する愛国的な視点と批判的な視点とを織り交ぜて書かれたこの詩は、Matthew Skwiatの言葉を借りるならば、“Wilde’s critique of British imperialism”か

つ“an ironic twist”なのである¹²。

先にも述べたように第15スタンザ以降、戦争に対するネガティブなトーンが高まってくると読むことができるが、実はこの詩の前半の部分にあたる第4スタンザにも、戦争による疲弊が描かれていると解釈できる箇所がある。“The yellow leopards, strained and lean/ The treacherous Russian knows so well,/ With gaping blackened jaws are seen/ Leap through the hail of screaming shell.”¹³ 冒頭の“the yellow leopard”は、*The Oxford English Dictionary*の“leopard”の項目にも“A lion passant guardant [French *lion léopardé*], as in the Arms of England.”とあるように、イングランドの国章に描かれるライオンを示し、この詩の中ではそこから連想される大英帝国の兵士達のことを指すものであると考えられる¹⁴。この兵隊の様子を形容する語句“strained and lean”をどのように解釈するかによって、ここでの“the yellow leopard”が持つ意味合いが大きく変わる。Fongは“strained and lean”の箇所は“extended bodies”という意味だと注釈をつけている。この解釈の場合、敵の攻撃に耐えながら戦地で奮闘している大英帝国軍のイメージを読み取ることができ、まさに拡張を続ける大英帝国の明るい側面が強調されている。一方、この“strained and lean”を「疲れて、やせている」という意味で捉えた場合、Fongの場合とは正反対の、戦争により疲弊している軍隊の姿を感じ取ることが可能であり、戦争に対する疑問を呈するスタンザの一つとも理解できる。大英帝国の拡大を示唆するFongの説とは異なる、戦争についての暗いイメージをこの詩句に読み取るという解釈可能性を提示する一つの理由は、“Ave Imperatrix”を収録した*Poems*が自費出版されてから一年も経たないうちにワイルドがアメリカで行った講演の中で、この“the yellow leopard”という表現を用いながら戦争について述べており、なおかつその箇所においてこの疲弊したイングランドの獅子たちというイメージを提示しているからである。

[A]t least is the only empire which a nation's enemies cannot take from her by conquest, but which is taken by submission only. [. . .] And we in our Renaissance are seeking to create a sovereignty that will still be England's when her yellow leopards have grown weary of wars and the rose of her shield is crimsoned no more with the blood of battle [. . .].¹⁵

この講演“English Renaissance of Art”(1882)において、征服することによってではなく服従することによってのみ手に入れられる、帝国としての「芸術」と、

人々を疲弊させる血なまぐさい戦争を通して確立してきた「大英帝国」の姿を対比的にワイルドは語っている。この箇所には、彼の芸術に対するある種の信頼が示されていると共に、戦争という行為に対する皮肉な視線がみてとれる。同じく“English Renaissance of Art”の中で、芸術への信頼と戦争の否定というワイルドの立場がより明確にあらわれている箇所がある。

Wars and the clash of armies and the meeting of men in battle by trampled field or leaguered city, and the rising of nations there must always be. But I think that art, by creating a common intellectual atmosphere between all countries, might—if it could not overshadow the world with the silver wings of peace—at least make men such brothers that they would not go out to slay one another for the whim or folly of some king or minister, as they do in Europe.¹⁶

ワイルドは、芸術が国という垣根を越えた共通の知的な環境を作り出すことで、人類を兄弟とし、殺し合いをすることがなくなるだろうと述べている。芸術が世界に平和をもたらすという独自の考えを彼は抱き、アメリカの聴衆の前でそれを表明しているのである。

ワイルドはレクチャーの中だけでなく、アメリカでのインタビューにおいても、戦争そして平和についての考えを語っている。これは同時代の軍事行動に対するワイルドの数少ない言及の一つであるが、ワイルドが当時の大英帝国によるエジプトへの侵攻について触れつつ、ユーモアを交えながら彼の戦争観を述べている箇所である。

“... It would be a fine thing if nations went to war with each other now over such questions as to which had the most beautiful women. How much better that than the senseless dispute about getting Egypt and possessing Arabi [Ahmed Orabi]. Now that we have caught Arabi we do not know what to do with him. When I was young I thought the wars of the roses were to decide whether a red or a white rose was the most beautiful. I learned afterward that it was a vulgar dispute. The right of one or two men to a crown or something of that kind.”¹⁷

イングランドがおこなっているエジプトへの軍事行為の無意味さを批判しつつ、自身の薔薇戦争に関する幼少期の誤解を冗談めかして話すワイルドであるが、こ

こでもやはり、美しいもの——ここでは美しい女性やバラ——がその頂点として存在する、彼にとっての理想的な平和のあり方がみてとれる。ワイルドによる戦争や平和に関する直接的な言及は決して多くないが、ここまで挙げてきた表現活動の中で共通して見られる要素は、彼は決して全面的に帝国主義的な戦争を支持していないことである。この点のみにおいても、戦争や平和とワイルドという、今までほとんど注目されてこなかった彼の一面を提示することができるであろう。しかし、彼の戦争・平和に関する思想が興味深い点は、彼が争いごとを解決する手段としての芸術を提案し、国家間の争いがあるとしても武力による王権争いではなく、“the most beautiful”なものを決めるための争いであれば許容をするというような唯美主義的な側面を持つことである。このことが、ワイルドを単なる平和主義者という枠組みの中にとどまらせず、唯美的平和主義者とも呼べるようなユニークな思想の持ち主として理解することを可能とするのである。

“Ave Imperatrix”とアメリカでのレクチャーやインタビューの中にワイルドの戦争観・平和観を見てきたが、この視点から童話“The Young King”(1891)を読んでもみると、そこには戦争を想起させる表現が散りばめられていることがわかる。特に注目すべきは、物語中で若い王が3度見る夢の最後のものである。その夢の中で、王のためのルビーを探す人々をしもべとして従えたAvarice「貪欲」と、人々を殺すという脅しで、その「貪欲」が持つ穀物を手に入れようとするDeath「死」がやりとりをしているが、「貪欲」と「死」が言葉を交わしているまさに同じ時に戦争が行われているということが描きこまれている。「貪欲」の持つ穀物を「死」が求めるが、その要求が棄却され、「死」は「貪欲」のしもべたちを殺めた場面において、文脈上特に言及する必然性のないアフガン戦争を想起させる語句が挿入されているのである。

“Thou [Death] hast slain a third of my servants,” she [Avarice] cried, “get thee gone. There is war in the mountains of Tartary, and the kings of each side are calling to thee. The Afghans have slain the black ox, and are marching to battle. They have beaten upon their shields with their spears, and have put on their helmets of iron. [. . .] Get thee gone, and come here no more.”¹⁸

この引用箇所では、アフガニスタンで戦争が行われているということがはっきりと述べられている。その中に「アフガニスタン人が黒い雄牛を殺してきた」という表現があるが、この雄牛は一つの解釈として大英帝国の兵士を指していると解

積することが可能である。典型的な英国民を示す言葉として John Bull という表現が用いられることはよく知られることであるが、その bull という言葉を雄牛のイメージへと転換し、カリカチュアなどで英国民を雄牛として描くこともしばしばあった。Figure 2 は、1878 年 11 月の *Punch* に掲載された第二次アフガン戦争を扱った、John Tenniel による戯画である¹⁹。



Figure 2

アフガニスタンの険しい山々へ入っていこうとする英国民の姿が、“Where are we now?” というキャプションと共にやや不安げな様子の雄牛に描き換えられている。なお、“the black ox” という表現については、*The Oxford English Dictionary* の ox の項目の中に “fig. the black ox: adversity, hardship, misfortune; the cares of life” とあるように、やはり戦争のネガティブな側面を想起させるような含意がある²⁰。こうして物語中にアフガニスタンと大英帝国との戦争という対立関係が描きこまれ、その戦地こそ「死」が赴くべき場所だということが強調されているのである。

このようなアフガニスタン人に殺される英国民という側面が強調された場面を読むと、大英帝国の正義に反抗する現地の人々という構図をワイルドは“The Young King”の中に表現しているようにも思える。しかし、戦争に関わっている時点で大英帝国、アフガニスタンのどちらもが咎められるべきだという考えを、次に挙げる場面から読み取ることができる。その場面とは、3つの夢を見終わって、贅沢な品々を身に付けることをやめるという若い王に対し、年老いた Bishop がその判断を正し、王らしい格好をさせようとする箇所である。

I [the Bishop] know that many evil things are done in the wide world. [. . .] The lions lie in wait for the caravans, and leap upon the camels. The wild boar roots up the corn in the valley and the foxes gnaw the vines upon the hill. [. . .] Shall the lion do thy [the Young King's] bidding, and the wild boar obey thee? Is not He who made misery wiser than thou art?²¹

世界中で行われている悪しきことの例として、ライオンがキャラバンやラクダに

襲い掛かり、イノシシが鼻で穀物を掘り返していること、キツネがブドウにかじりつくことなどが挙げられている。もちろんこれらのイメージは“The Young King”が童話集の中の一編だということを思い返すと、イソップ物語のような動物表象による寓話だと考えるのが自然である。しかし引用内の問いかけ、“Shall the lion do thy bidding, and the wild boar obey thee?”においてlionとwild boarが特に前景化されていることに注目すると、違った側面が見えてくる。“the lion”は言うまでもなく、“the yellow leopard”とたとえられていたイングランドの軍隊とイメージが重なり合う。実際多くの同時代の戯画において、例えばFigure 3に載せたものがその一つであるが、勇猛果敢な大英帝国の勢いを表現する際にライオンの姿が用いられている(キャプショ

ンは“Fiat Justitia!! The British Lion and the Afghan Wolves.”)²²。では一方の“the wild boar”は一体何を表しているのか。ライオンが大英帝国であるならば、このイノシシはアフガニスタンであると考えられる。それは単に物語中に描き込まれている構図からのみ言えるのではなく、アフガン戦争に関する戯画において、アフガニスタンが“Afghan Boar”として表現されている例が同時代のテキストとして存在していることを踏まえてのことである。Figure 4²³は、1878年11月のPunchに掲載された戯画であるが、当時の“viceroy of India”であったEdward Robert Bulwer, first Earl of Lyttonが、逃げようとしているようにも見える“Afghan Boar”を背後から狩ろうとする様子が示されている²⁴。ライオンとして描かれる大英帝国、イノシシとして描かれるアフガニスタン、こ



Figure 3



Figure 4

のように捉えたときに、先の問いかけが若い王、すなわち国家元首に投げかけられているものだと考えると、非常に鋭い政治的諫言のように思われる。実際、インド・アフガニスタンで活動していた大英帝国軍は本国の命令を超えた行動をとることもあった。例えば、Martin Ewans が指摘するように、第二次アフガン戦争の際に、戦地にいたイギリス人司令官が軍事法廷においてやみくもに絞首刑を執行し現地の人々を殺め、「法の名のもとに殺人」だという非難を大英帝国が受けたということが挙げられる。物語中の問いかけは、王であっても大英帝国軍は制御できなくなっており、アフガニスタンを従わせることなどなおさら無理なことである、という拡張主義、あるいは当時の政策名で言えば“forward policy”の限界を示唆するかのようである。ワイルドがこういった *Punch* の記事を “The Young King” 中の表象として用いた可能性については議論の余地があるが²⁵、このような同時代のテキストを、大英帝国とアフガニスタンが戦争を行っていたことを仄めかす表現が使われているこの童話の、新たな読み方を探るために用いることは十分に可能である。

“The Young King” の最後の部分では、王らしからぬみすばらしい格好をしたまま若い王がキリストの像に祈りを捧げる。すると太陽の光が差ってきて、その恰好がみるみるうちに美しいものへと変化していく。

[T]he sunbeams wove round him [the Young King] a tissued robe that was fairer than the robe that had been fashioned for his pleasure. The dead staff blossomed, and bare lilies that were whiter than pearls. The dry thorn blossomed, and bare roses that were redder than rubies. Whiter than fine pearls were the lilies, and their stems were of bright silver. Redder than male rubies were the roses, and their leaves were of beaten gold.²⁶

こうして見事な王としての姿をした若い王を見た周囲の人々は、畏敬の念を覚え、若い王に対してひざまずく。この周囲の人々の中には、剣と楯を持って暴動を起こそうとやってきた人々も含まれているが、王らしからぬふるまいの若い王を殺して自分たちで国を治めようとやってきた彼らも剣を収め敬意を捧げるのである (“the nobles sheathed their swords and did homage [...]”²⁷)。若い王を殺すためにやってきたこれらの人々を服従させることができた一義的な理由が、宗教的な力がはたらいたためであることは物語の流れ上、あるいは物語全体にみられるキリスト教的なイメージの連鎖からみても明白なことである。しかし、もしワイルドがア

メリカで語っていたような唯美的平和主義者としての考え——すなわち「美」や「芸術」が平和をもたらす——というものに則ってこの場面を考えるとすると、先に挙げた引用において、喜びのためだけに着ていたローブよりもより美しいローブを手に入れたことや、ユリやバラの色鮮やかさが詳細に、仰々しく強調されている意味や必要性がより明確に理解できるかもしれない。慣習的に読み取られている“The Young King”の宗教的寓意とはまた別に、若い王自身が「美しいもの」の象徴として立ち現れることで争いが治まり平和がもたらされるという、唯美的平和主義者ワイルドとしての理想的な平和の形がその物語では示されているのである²⁸。

またこの場面は、本論文の最初に扱った“Ave Imperatrix”の最終スタンザとも響きあう。“Yet when this fiery web is spun,/ Her watchmen shall descry from far/ The young Republic like a sun/ Rise from these crimson seas of war.”²⁹ このスタンザは、ワイルドがMrs Alfred Huntに宛てた1880年8月25日付けの手紙の中で“my first attempt at political prophecy”「私の最初の政治的予言の試み」と明言している箇所である³⁰。この詩のなかでは、戦争の後に“young republic”が日の光のように立ち現れており、一方の“The Young King”の中では暴動を起こしていた人々でさえも、王が日の光を浴び、大衆の前にその神々しい姿を現すことで服従をする。ワイルドは“Ave Imperatrix”の中で試みた政治的予言を、童話という形に変えて再度試みたのではないだろうか。

ここまで、“Ave Imperatrix”、アメリカでの講演やインタビュー、そして“The Young King”の中に表現された、ワイルドの同時代の戦争、特に第二次アフガン戦争に関する言説を、当時のジャーナリズムと併せて考察してきた。同時代の戦争などに関する言及が少なく、それらにほとんど関心が無いように考えられてきたワイルドであるが、以上の考察を踏まえると、唯美主義者として平和を望んでいる彼の側面が明らかとなる。詩、講演、インタビュー、童話といった全く異なるジャンルを用いて、戦争にまつわる表現活動を行ったワイルドは、“Critic as Artist”で“the critic has at his disposal as many objective forms of expression as the artist has”と述べているような批評態度を実践したのだとも考えられる³¹。このような戦争に関する様々な活動を彼が行うことができた理由として、ヴィクトリア朝時代に発達した豊かなジャーナリズムがその背景として存在したということは軽視できない。“Ave Imperatrix”は当初新聞で発表され、アメリカでの講演内容やインタビューは英米の新聞にただちに印刷され広く流布した。“The Young King”も童話集の一編として出版される前に、*Lady's Pictorial*において世に現れた。そして

ロンドンから遠く離れたアフガニスタンやインドでの戦争の様子を、文字情報だけではなく、可視化できる形でロンドンの人々に届けたのもジャーナリズムであり、またその情報を戯画といった別の形に移し替えることも当然ジャーナリズムがなしえた業である。ワイルドはそのようなジャーナリズムとの戯れによって彼独自の多様な意見を形成し、表明していった。本論文においては、彼の活動をジャーナリズム文化の文脈から読み解くことで、唯美的平和主義者としてのオスカー・ワイルドという側面に特に光を当て、新たなワイルド像を提示した。

* 本論文は、日本ワイルド協会第38回大会での口頭発表を加筆・修正したものである。

注

- 1 Morton, Patricia. "Wars and Military Engagements." Mitchell 844-45. Print.
- 2 本論文においては、*Poems*に収録されたヴァージョンを“Ave Imperatrix”のテキストとして扱うこととする。
- 3 Reed, 135.
- 4 “The Difficulties of an Afghan Expedition Foreshadowed.” *The Penny Illustrated Paper and Illustrated Times* 9 Nov. 1878.
- 5 Wilde, “Ave Imperatrix,” 137.
- 6 1879年1月に発行された *Proceedings of the Royal Geographical Society and Monthly Record of Geography* の Vol. 1, No. 1 の pp. 38-62 に掲載されている。
- 7 Matthew Hofer と Gary Scharnhorst が編集した *Oscar Wilde in America: The Interviews* や、Roy Morris, Jr. による *Declaring His Genius: Oscar Wilde in North America* などが好例である。
- 8 “Oscar Wilde: An Interview with the Apostle of Aestheticism,” 61-62.
- 9 “Nationality.” Def. 2. *The Oxford English Dictionary*. June 2015. Web. 4 July 2015.
- 10 Sloan, 102.
- 11 Wilde, “Ave Imperatrix,” 137.
- 12 Skwiat, Matthew. ““A Very Irishman.””
- 13 Wilde, “Ave Imperatrix,” 136.
- 14 “Leopard.” Def. 3b. *The Oxford English Dictionary*. June 2015. Web. 4 July 2015.
- 15 Wilde, “English Renaissance of Art,” 145.
- 16 Wilde, “English Renaissance of Art,” 144.
- 17 “The Apostle of Beauty in Nova Scotia,” 108-09.
- 18 Wilde, “The Young King,” 147-48.
- 19 “Where Are We Now?” *Punch* 23 Nov. 1878.

- 20 “Ox.” Def. 3. *The Oxford English Dictionary*. June 2015. Web. 4 July 2015.
- 21 Wilde, “The Young King,” 151.
- 22 “Fiat Justitia.” *Punch* 20 Sept. 1879.
- 23 “Pig-stickers, Beware!” *Punch* 9 Nov. 1878.
- 24 彼とワイルドは、1891年5月に手紙のやり取りをしたこともある関係で、*Lady Windermere’s Fan* には“TO THE DEAR MEMORY OF ROBERT EARL OF LYTTON IN AFFECTION AND ADMIRATION”という献辞が添えられている。詳しくは Holland, p. 480 を参照。
- 25 ワイルドの書簡において、*Punch* への言及が複数回なされていることから、その頻度は別として、彼が *Punch* を知っており、多少なりとも読んでいたことは間違いない。
- 26 Wilde, “The Young King,” 26-27.
- 27 Wilde, “The Young King,” 152.
- 28 “The Young King”の解釈については、Philip K. Cohen の著作 *The Moral Vision of Oscar Wilde* の pp. 73-104 や Rachael Cameron の論文 “Oscar Wilde’s ‘The Young King’: The Fairy Tale as Countermemory” などを参照。
- 29 Wilde, “Ave Imperatrix,” 139.
- 30 Holland, 94.
- 31 Wilde, “Critic as Artist,” 187.

参考文献

- “The Apostle of Beauty in Nova Scotia.” *The Morning Herald* 10 Oct. 1882. Mikhail 105-10. Print.
- Cameron, Rachael. “Oscar Wilde’s ‘The Young King’: The Fairy Tale as Countermemory.” *Australian Folklore* 17 (2002): 53-67. Print.
- Cohen, Philip K. *The Moral Vision of Oscar Wilde*. Cranbury: Associated UP, 1978. Print.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. 1987. London: Penguin, 1988. Print.
- Ewans, Martin. *Afghanistan: A New History*. Richmond: Curzon, 2001. Print.
- Fong, Bobby, and Karl Beckson, eds. *The Complete Works of Oscar Wilde: Poems and Poems in Prose*. Vol. 1 Oxford: Oxford UP, 2000. Print.
- Frankel, Nick. “‘Ave Imperatrix’: Oscar Wilde and the Poetry of Englishness.” *Victorian Poetry* 35.2 (1997): 117-37. Print.
- Guy, Josephine M., ed. *The Complete Works of Oscar Wilde*. Vol. 4 Oxford: Oxford UP, 2007. Print.
- Hofer, Matthew, and Gary Scharnhorst, eds. *Oscar Wilde in America: The Interviews*. Urbana: U of Illinois P, 2010. Print.
- Holland, Merlin, and Rupert Hart-Davis, eds. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York:

- Henry Holt, 2000. Print.
- McLoughlin, Kate, ed. *The Cambridge Companion to War Writing*. Cambridge: Cambridge UP, 2009. Print.
- Mikhail, E. H., ed. *Oscar Wilde: Interviews and Recollections*. Vol. 1 London: Macmillan, 1979. Print.
- Mitchell, Sally, ed. *Victorian Britain: An Encyclopedia*. New York : Garland, 1988. Print.
- Morris, Roy, Jr. *Declaring His Genius: Oscar Wilde in North America*. Cambridge: Belknap P of Harvard UP, 2013. Print.
- Morton, Patricia. "Wars and Military Engagements." Mitchell 844-45. Print.
- "Oscar Wilde: An Interview with the Apostle of Aestheticism." *The Daily Examiner* 27 March 1882. Mikhail 59-64. Print.
- Reed, John R. "The Victorians and War." McLoughlin 135-47. Print.
- Ross, Robert, ed. *The Collected Works of Oscar Wilde: A House of Pomegranates, The Happy Prince and Other Tales*. Vol. 10 London: Routledge, 1993. Print.
- . *The Collected Works of Oscar Wilde: Miscellanies*. Vol. 14 London: Routledge, 1993. Print.
- Skwiat, Matthew. "'A Very Irishman.' The Nationalist Strain in the Early Works of Oscar Wilde." *The Oscholars*. Nov. 2013. Web. 17 June 2015.
- Sloan, John. *Oscar Wilde*. 2003. Oxford: Oxford UP, 2009. Print.
- Strachan, Hew. "The Idea of War." McLoughlin 7-14. Print.
- Wilde, Oscar. "Ave Imperatrix." Fong 136-39. Print.
- . "Critic as Artist." Guy 124-206. Print.
- . "The English Renaissance of Art." Ross, *Miscellanies* 243-77. Print.
- . "The Young King." Ross, House 3-27. Print.
- 『オスカー・ワイルド研究』第10号 日本ワイルド協会、2009.
- 貝嶋崇「オスカー・ワイルドの詩——詩人ワイルドの原点」 富士川義之ら編 3-20.
- 鈴木英明「ワイルドと政治」 富士川義之ら編 439-48.
- 原田範行「ワイルドとジャーナリズム」 富士川義之ら編 401-23.
- 富士川義之、玉井暲、河内恵子編『オスカー・ワイルドの世界』 東京・開文社、2013.